

保育者養成校における子どもの歌の弾き歌いの重要性

— 指導法に関する一考察 —

Importance of Playing Singing of Nursery Rhymes in Nursery Teacher Training School

— Consideration about Teaching Methods —

近江秀崇*・岡本順子**・水口美樹**・水野みか**・伊藤英子**

Hidetaka OMI, Junko OKAMOTO, Miki MIZUGUCHI, Mika MIZUNO, Hideko ITO

要約

日々の保育の現場では様々な歌が歌われている。歌われる歌の種類としては、毎日の基本的な生活習慣を身につけるもの、四季の自然の美しさや生き物の存在を身近に感じるもの、園で行われる行事に向けて歌われるものなどが挙げられる。現代では、CDなどの録音媒体を通して伴奏を流し子どもたちに歌わせることも可能だが、やはり保育者自身の手で、子どもたちが歌いやすいテンポや音量などに配慮した伴奏を心掛けることが大事である。また、保育者が奏でる生の音や歌声に触れながら、一緒に歌い音楽を共有することが、子どもの豊かな表現力や感性を育むことに結びつくと考えられる。しかし、ピアノの経験がない学生にとって、ピアノを弾きながら歌うという「弾き歌い」は、決して容易なものではない。

保育者として現場に出る準備をする学生に、この「弾き歌い」の能力をつけるのが保育士養成校で音楽を教える教員の役割であることから、2年間の音楽の授業の指導法に関する考察や、教員間での情報交換に取り組んだ。また、筆者が昨年度に行った、東濃5市の保育施設において歌われている四季の歌に関する調査結果と、昨年度の学生の習得状況の比較を行ったところ、取り扱われる歌に関して、大学と保育施設の間で差があることも明らかになった。

キーワード:

保育者養成校, 子どもの歌, 弾き歌い

I. はじめに

1) 「子どもの歌」とは

子どもが歌う歌として知られている代表的な呼称として、「わらべうた」・「唱歌」・「童謡」の3つが挙げられる。「わらべうた」は子どもたちの遊びの中から生まれ、口伝いで歌い継がれてきた歌を指し、「げんこつやまのたぬきさん」や「かごめかごめ」など、手遊びや集団遊びの歌としても用いられることが多い。「唱歌」はいわゆる「文部省唱歌」を指し、明治から昭和にかけて文部省が編集し、当時の学校教育の現場で使用する教科書に掲載された楽曲である。「かたつむり」や「ゆき」など、保育現場で歌われている歌も多い。「童謡」は児童文学者である鈴木三重吉(1882～

1936)により、1918年7月1日に創刊された児童文学雑誌『赤い鳥』に掲載された童謡詩が始まりとされるが、1919年5月号に掲載された西條八十(1892～1970)による童謡詩、「かなりや」に成田為三(1893～1945)が曲をつけたのが音楽としての「童謡」の始まりと考えられる。この後、『金の船』など類似した児童文学雑誌が次々に発行され、現在も歌い継がれている「七つの子」、「この道」、「からたちの花」など多くの作品がこの時期に作曲されている。¹⁾しかし、これらの作品は現代の保育施設で歌われている童謡というよりは、日本を代表する歌曲という位置付けになっている。また、『赤い鳥』創刊以前は「わらべうた」のことを「童謡」と呼んでおり、時代に

*本学専任講師, **本学非常勤講師

よって認識も異なってくる。一方、現代においても保育施設で歌われる歌として、常に新しいものが作曲されている。その中には、テレビの教育番組やアニメソングなどから保育施設で歌われるものとして定着している歌も数多くあることから、近年では「童謡」＝「子どもが歌う歌」という認識が一般的であると考えられる。以上のことから、本稿では「保育施設で歌われている歌」を表す表現として「子どもの歌」と表記することとする。

2) 本学の音楽の授業について

本学では2年間で音楽Ⅰ～Ⅳの4つの授業が開講されており、専任講師1名、非常勤講師4名の計5名で担当している。まず音楽Ⅰでは、主にピアノ初心者を対象として『標準バイエルピアノ教則本』（全音楽譜出版社）を、ピアノ経験のある学生やバイエルを修了した学生を対象に『ブルクミュラー 25 の練習曲』や『ソナチネアルバム 1』（いずれも全音楽譜出版社）などのテキストを使用し、ピアノの基礎的な演奏技術を身につけることを目標としている。続いて音楽Ⅱ・Ⅲでは『簡易伴奏によるこどもの歌ベストテン』（板東貴余子：編、ドレミ楽譜出版社）を主要テキストとして使用し、春～冬の四季の歌や保育現場で必要となる生活の歌など、子どもの歌の弾き歌いを学ぶ。音楽Ⅳは系列校にあたる高等学校の保育クラス出身者が対象で、入学前に高等学校の授業の中でピアノに取り組んできたことから、より多くの子どもの歌やマーチなど、さらにレパートリーを広げることを目指す。

3) 弾き歌いの使用テキストについて

本学の弾き歌いのテキストとして使用されているのは、先述の通り『簡易伴奏によるこどもの歌ベストテン』（板東貴余子：編、ドレミ楽譜出版社）である。²⁾ 取り上げられている曲目としては、「おはようのうた」・「さよならのうた」などの『毎日のうたベストテン』、「チューリップ」・「ちょうちょう」などの『春のうたベストテン』、

「うみ」・「たなばたさま」などの『夏のうたベストテン』、「どんぐりころころ」・「まつぼっくり」などの『秋のうたベストテン』、「たきび」・「雪のペンキやさん」などの『冬のうたベストテン』、「きょうからおともだち」・「たんじょうび」などの『行事のうたベストテン』、「おもちゃのチャチャチャ」・「いぬのおまわりさん」などの『好きなうたベストテン』、「アンパンマンのマーチ」・「となりのトトロ」などの『幼稚園・保育園人気ソング・ベストテン』、以上の8項目に各10曲ずつ、それに「ミッキーマウス・マーチ」・「ビビディ・バビディ・ブー」など『ディズニーであるこう!』の項目の5曲を加えた合計85曲が収録されている。

なお、現在使用しているのは2014年12月30日初版の〔改訂新版〕であり、『幼稚園・保育園人気ソング・ベストテン』と『ディズニーであるこう!』の収録曲の一部が以前のものに変更されている。これはアニメソングなどの流行が時代によって変化しているためと考えられる。

II. 弾き歌いの重要性とそのあり方

幼稚園教育要領の第2章、5領域の中の「表現」のねらいとして、“(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。”³⁾ とあるように、子どもたちの豊かな感性や表現力を育むために、音楽は重要な役割をもっている。歌を取り扱う際は、歌詞と旋律とを表面的に歌うだけではなく、各々の作品がもつ楽しさや美しさなど、さまざまな魅力を保育者自身が味わい、歌って子どもたちに伝える必要があると考える。

鈴木(2011)は、“現在ではCDなどの音源を使って伴奏とし歌わせることもあるが、それでは保育者は子どもたちを監督する管理者にすぎず子どもを育てる役割を果たしていないため、やはり保育者自身の手で子どもに歌を伝えるべきであ

る。そして、弾き歌いをしながら子どもたちに歌わせる際に、曲にふさわしい音量・表現・表情で歌い、子どもたちに聞かせるだけでなく、ともに歌い、その時間と音楽と内容を共有することが大切である。”と述べている。そして、“音楽というコミュニケーションツールを通して、保育者が笑顔で子どもたちに歌いかけることにより、子どもたちは保育者の眼差しから安心感を得て自分の存在を認められていることを実感する。”と、「人間関係」の領域との関連を指摘し、さらには、歌う環境を整えることの大切さ、子どもの歌い方や表情で健康状態を知ること、歌詞から言葉の表現を学ぶことなど、歌は5領域のすべての要素に関わりを持っていることを指摘した。⁴⁾

CDなどの録音媒体は、保育現場のさまざまな場面において、状況に応じて適宜使用することも必要である。しかし、歌の伴奏として使用するには、子どもたちの年齢や人数など、さまざまな状況に合わせるができず、歌う側が伴奏に合わせなくてはならない。一方、保育者自身が子どもたちの歌いやすいテンポや音量をその場の状況に応じて変化させながらピアノを弾き、その曲に相応しい声色や表情をつけ歌うことにより、一方通行ではない生の音楽に触れることができ、子どもたちもその曲の魅力を感じることができる。こうした音楽を通したやり取りが、保育者と子どもたちの信頼関係を深めることにつながると考えられる。

本学でも、このような弾き歌いの力をつけるために音楽の授業を展開しているが、ピアノを弾きながら歌うのは、決して容易なことではない。本学は、ピアノ経験がなく大学入学と同時に習い始めた初心者の学生と、高等学校から習い始めて入学したピアノ経験の浅い学生が半数以上を占め、このような学生にとってはとりわけ難しい作業となる。

平井(2016)は、“「弾き歌い」とは「楽譜を読む」・「鍵盤を弾く」・「音を聴く」・「歌詞を読む」・「歌を歌う」という5つの事柄を同時進行させるといって高度な技能が不可欠であり、さらには授業では「学習者の観察」「学習者の支援」と

いった児童や生徒を指導する能力が必要となる。”と述べている。⁵⁾ここで述べられているのは、「児童や生徒」とあるように学校の現場のことであるが、これが「幼児」となると、「幼児の観察や支援」は「児童・生徒」よりもさらに重要になってくると考える。

Ⅲ. 弾き歌いの指導法のポイント

～生活の歌と季節の歌を例に～

学生にとって容易ではない子どもの歌の弾き歌いの技術を習得させるために、教員側も日々試行錯誤している。一口に「子どもの歌」といっても、その曲のもつ雰囲気や特徴でも指導上重視するポイントは異なってくる。また、教員ごとでそれぞれの指導法があるため、一概に「この教え方が良い」と決められるものではないが、今後の学生指導に役立てることができるよう教員間で指導法を提案することにした。

以下、保育現場で歌われる歌の中で、重要な位置を占める生活の歌と四季の歌を例に、指導法のポイントを記すこととする。

1) 生活の歌「おべんとう」

「おべんとう(天野蝶 作詞・一宮道子 作曲)」は昼食の時間に長年保育現場で歌われている定番の曲である(譜例1)。歌詞は2番までであるが、それぞれの歌詞の最後に(いただきます)、(ごちそうさま)という台詞があることから(譜例1-①)、続けて歌うものではなく、1番は食べる前、2番は食べた後に歌われるものである。また、お弁当ではなく給食を食べる園では、歌詞の「おべんとおべんとううれしいな」の部分を「きゅうしょくきゅうしょくうれしいな」に置き替えて歌うことが多い。

弾き歌いをする際には、先述の通り「楽譜を読む」・「鍵盤を弾く」・「音を聴く」・「歌詞を読む」・「歌を歌う」という5つの事柄を同時進行させなくてはならないが、ピアノが初心者の学生にとっては、まず「楽譜を読む」・「鍵盤を弾く」の

2つだけで困難なことも多い。いきなり一度に5つの作業を同時進行するのは大変困難であり練習効率も悪い。まずはバイエルを弾くときと同じく、「楽譜を読む」・「右手で弾く」・「左手で弾く」・「両手で弾く」という手順で少しずつ弾けるようにすると良い。右手だけの練習の時から大事なのはやはり指使いである。間違えやすいのは、譜例1の2段目の頭のa¹音(ラ)を、「3」の指で弾いてしまう学生が多い。これは1段目の最後のg¹音(ソ)の音を「2」の指で弾くことから、そのままの流れで弾いてしまうのが原因であるが、2段目に入るときに「5」の指をa¹音に移動することにより2段目は同じポジションで弾くことができる(譜例1-②)。また、この編曲は左手の伴奏の動きが不規則であることから両手になると弾きにくく感じるが、2段目の1小節目から3小節目の1拍目まで、右手と左手が10度音程(長短は除く)で平行に動くことを説明し、意識しながらゆっくり弾くように指導する(譜例1-③)。

ある程度自信を持って両手で弾けるようになったら、これに歌唱をつけながら弾くが、ここでも躓いてしまう場合が多い。歌詞を理解していないのが大きな原因として挙げられる。特に歌詞を知らない曲に取り組む際に、音譜を見て弾けるようになっていたのが、次は歌詞を見て歌おうとするために、音譜を見ることができなくなってしまい、歌詞で迷った瞬間、ピアノも弾き間違えたり止まったりしてしまうことが多い。「弾き歌い」の難しさとは、脳が一度に複数の情報を処理するのが難しいことに関連していると考えられる。「おべんとう」の場合は、歌い出しの歌詞「おべんとおべんとううれしいな」の部分は知っている学生が多いため、躓くことは少ないが、その後の歌詞を知らない場合が多いためにそこで止まってしまう。この対処法として、「弾き歌い」をする前に、歌詞をよく読み、歌詞を理解し、イメージする。それができたら、右手の旋律だけを弾きながら歌ってみる。同様に左手だけを弾きながら歌ってみて、それぞれができたらようやく両手で弾い

て歌ってみる。その際、ピアノに苦手意識がある学生には、まず歌詞を暗記するように指導する。歌詞ではなく音譜の方に目を向けられるため、ピアノのミスも減るからである。また、歌詞を暗記させる際は、丸覚えではなく、歌詞を深く読み込むことにより、情景を思い浮かばせて関連付けながら覚えるように指導する必要もある。

【譜例1】「おべんとう」

また、この曲でもっとも間違えやすいのはリズムである。旋律のほとんどが♪♪♪のリズムで書かれているが、間違えて♪♪♪のリズムで弾いてくることが多い。これについては、生活の歌には「おはようのうた」、「おかえりのうた」、「さよならのうた」等、♪♪♪のリズムで書かれている曲が多いため、混同しやすいのが原因の一つと思われる。また、インターネットで視聴できる無料動画でも大半が間違ったりリズムで演奏されている。学生自身も幼児の時に間違ったりリズムで歌ってきており、そのままのイメージが残っていることが多い。正しいリズムで演奏するために、まず教員が見本を見せ、正しいリズムと間違ったりリズムの違いを聴き比べてもらう。それでも難しい場合は、手でリズムをたたいて学生自らリズムの違いを感じる大切である。

もっとも、保育現場の子どもたちにまで正しいリズムを強制することは好ましくないが、いずれ現場に出る学生には正しいリズムで指導するのが教員の役割であると考えられる。

2) 春の歌「チューリップ」・「ちょうちょう」

春の歌の代表的なものとして、「チューリップ (近藤宮子 作詞・井上武士 作曲)」と「ちょうちょう (野村秋足・稲垣千穎 作詞・スペイン民謡)」の2曲が挙げられる。昔から誰もが知り、一度は口ずさんだことのあるこの2曲は、音域は狭く、リズムは4分音符と8分音符のみで構成されており、保育施設でも未満児から歌える曲として取り上げられることが多い。本学の学生においては、新年度になり、弾き歌いの導入としてこの2曲に取り組むことが多いため、ピアノと歌とをバランス良く指導する必要があるが、やはりピアノを両手で弾けるようになり、いざ歌唱を入れようとすると途端に躓くようになり、困難さが増す。弾き歌いの難しさについては、すでに述べた通りであるが、歌唱自体の課題としては、「歌を知らない」・「歌うのが恥ずかしい」・「高音が苦手」・「声が出ない」などと、取り組む前から学生自身が「難しい」と思い込んでいることも多々ある。

歌うことに対する抵抗をなくすために、次の手順を踏んで練習すると良い。

1. 歌詞の意味の理解として、リズムなしでまず歌詞を朗読する。その際、一緒に言葉の意味やフレーズ(繋がり)を考える。「チューリップ」の終わり4小節の歌詞「どの花みてもきれいだな」の部分には(譜例2-①)、作詞者の「何事においてもそれぞれのいいところを見て過ごそうという自分の人生の基本的な考え方、殊に、弱いものには目を配りたい」という気持ちが込められており⁹⁾、このように歌詞を少し深く読み取ること、その曲に対する興味を持たせることができる。また、レッスン時間に余裕がある場合は学生と一緒に考えてみるのも良い。

2. 発声練習を兼ねてハミングや「ラララ～」などで音程を取り、できるならば譜読みで歌ってみる。その際、一番低い音(譜例2-②)と一番高い音(譜例2-③)の音程をしっかりと取るように指導する。

【譜例2】「チューリップ」

3. 歌詞をつけて歌う時は、言葉のつながりや発音などに注意する。「ちょうちょう」の場合、歌いながら強弱を見つけていく。歌い出しの「ちょうちょう ちょうちょう」の部分は強めに歌い(譜例3-①)、続けて他の歌詞も子音をしっかりと意識して言葉ははっきりと歌う。この時、「なのはにとまれ」など、1つの言葉のつながりを考え、ひといきで歌えるように注意する(譜例3-②)。これは「チューリップ」も同様である。「チューリップ」にはブレス記号がついており、ブレス記号と各段の最後についている休符のところで息継ぎをし、2小節をひといきで歌えるように指導する(譜例2-④)。

【譜例3】「ちょうちょう」

2曲とも慣れてきたら仕上げとして、伴奏はやわらかく子どもが無理なく歌いやすいテンポで、連打するところは乱暴にならずやわらかくなめらかに弾くなどの工夫をする(譜例3-③)。ピアノ演奏が得意で進度が速い学生には、コードを

使った伴奏のアレンジを提案し、保育現場で臨機応変に対応できる力をつけることも大切である。

3) 夏の歌「あめふりくまのこ」

鶴見正夫 作詞・湯山昭 作曲の「あめふりくまのこ」は、5番まである歌詞が物語調になっており、情景がイメージしやすい曲である。曲が長めで歌の音域も10度と広いことから、保育現場では年齢が高めの年中・年長クラスで歌われることが多い。季節はその題材から初夏～梅雨に歌われることが多く、梅雨の季節に親しむための曲でもある。

【譜例4】「あめふりくまのこ」

①高音に向かって
②低音はやさしく添えるように

③

③

③

③

前奏は、右手に出てくる1オクターブを使用したモチーフを確認させると同時に、オクターブの高音と低音の弾き分けをするように指導する。2段目の1拍目の3連符はオクターブの高音に向かって上昇するので、盛り上げていくように、ま

た低音は強くならずそっと添えるように弾く（譜例4-①・②）。また、手が小さく1オクターブが届かない学生もいるが、その場合は特に手首を柔軟に使い力が入らないように、なるべく繋げて弾けるように指導する。

オクターブの音程を使用した動きは左手にも多用されており、1コーラスの12小節間に4回登場する（譜例4-③）。この動きを使用することにより、曲の幅広さを表現できることを認識させる。

また、同じ♪♪のリズムが多用されている曲として春のうたに掲載されている「手のひらを太陽に（やなせたかし 作詞・いずみたく 作曲）」を例に挙げ（譜例5）、同じ♪♪のリズムでも「手のひらを太陽に」がマーチ風の曲であることに対し、「あめふりくまのこ」は優しく話しかけるような曲想であり、曲によって異なる表現ができることを感じてもらう。

「あめふりくまのこ」はその物語性の強さから、絵本も出版されており（高見八重子 絵・ひさかたチャイルド出版・2009年）、歌う際にも、物語を理解し子どもたちに語りかけるような歌い方を心掛けることも大事である。

【譜例5】「手のひらを太陽に」

【譜例7】「たきび」

④指使いに注意しゆっくり練習する

Allegretto (あたたかく、いきいきと)

①

②

③

④

⑤

f音 e音 g音 f音 e音 e音 c音

歌唱部分に入ると旋律の特徴として、同音の反復が多くみられる。同じ音が続くと、どうしてもスタッカート気味になり曲の流れが途切れてしまう。できるだけレガートになるよう注意深く練習する。同音の最初の音を弾いたら、指と鍵盤を離さないで次の音を打鍵すると良い（譜例7-②）。第3フレーズ（17～20小節）に入るとマイナーコードが出てくる。右手のリズムも ♩ ♪ が登場し、印象深いフレーズになっている（譜例7-③）。ここは強弱をつける等、表現の工夫をさせることが重要である。第4フレーズ（21～24小節）は左手伴奏に三和音が出てくるところが2か所ある（譜例7-④）。指の弱い学生は和音が不揃いになりやすい。三和音を揃えて弾けるように自分の耳でよく確かめながら練習する。その際、特に小指の音が弱くならないように気を付ける。そして、低声部の音、＜f音→e音→g音→f音→e音→c音＞をよく聴きながら弾くと響きがより豊かなものになる（譜例7-⑤）。

ある程度ピアノが弾けるようになったら、次は歌を練習する。その際、歌詞を何度も朗読し、ど

こが大事な部分か、同じ言葉の繰り返しはどのように表現したら良いか考える。歌詞の最初の子音は、特にはっきり発音する。「かきね」の「k」、「さざんか」の「s」などは注意が必要である（譜例7-⑥）。そして、次に、口の開き方、顔の表情を注視しながら鏡の前で歌ってみる。また、フレーズやテンポの把握のためには歌いながら歩いてみるのも良い練習になる。その時にフレーズ毎に歩く方向を変える、指揮をしながら歩くなども曲の理解が深まる。

＜最初にピアノを弾く練習、次に歌を歌う練習、最後に歌いながらピアノを弾く練習＞というように順序立てて学生に練習させることが大事である。このように弾き歌いを取り入れて仕上げていく過程で「たきび」をしっかり習得することができる。歌を歌うことを取り入れたピアノの練習方法は、「たきび」以外の曲にも非常に効果的である。

IV. 岐阜県東濃地区（5市）の月別取り扱い曲のアンケート結果と学生の習得状況の比較

以上のように、学生がより表現力豊かな演奏をできるようにするために、教員が指導法を研究しながら日々指導にあたっている。決して子どもたちに芸術性の高い音楽を習得させるためではなく、保育者から発せられる表現力豊かな音楽に少しでも多く触れることにより、そこから子どもたちが自分の感じたことを自由に表現できる力を広げていくためである。それは音楽の表現だけではなく、絵を描いたり、体を動かしたりと、色々な表現力につながっていくものと考えられる。

しかし、本学の授業で取り扱う曲が、果たして今の保育現場に相応しいのかどうかという課題も見えてきたため、筆者が昨年度に行った共同研究“保育施設で歌われている四季の歌に関する研究”（中京学院大学中京短期大学部研究紀要 第47巻第1号）¹⁾のアンケート結果と、昨年度在籍していた学生がどの曲の弾き歌いを習得したかの受講状況を比較することにした。昨年度行ったアンケー

トとは、岐阜県東濃地区の5市（多治見市・土岐市・瑞浪市・恵那市・中津川市）の107園の保育施設を対象に実施した、各月で取り扱っている曲を調査したものである。107園の全クラスを対象に用紙を配布し、311部回収した（回収率72.7%）。岐阜県東濃地区の5市全体で各月に最も多く歌われている歌と、本学の学生のうち、どのくらいの学生がその歌の弾き歌いを習得したのかを比較し、その結果を以下の【表1】に示す。

【表1】東濃地区（5市）の各月で最も多く歌われている歌と、平成28年度の本学の習得者数の比較

月	各月で最も多く歌われている歌	割合	
		5市全体 (/311)	平成28年度 習得者数 (/受講者数)
4月	チューリップ	83.3%	98.9%
5月	こいのぼり	94.9%	78.4%
6月	かたつむり	77.8%	96.6%
7月	たなばたさま	85.2%	84.1%
8月	おばけなんてないさ	37.6%	29.5%
9月	どんぐりころころ	76.2%	82.0%
10月	どんぐりころころ	91.0%	82.0%
11月	やきいもグーチーパー	73.0%	31.1%
12月	あわてんぼうのサンタクロース	92.3%	34.4%
1月	まめまき	86.5%	3.2%
2月	まめまき	81.7%	3.2%
3月	うれしいひなまつり	78.5%	0.0%

本学の昨年度（平成28年度）の弾き歌いの受講状況は、授業で使用していた受講表をもとに学生が弾き歌いを習得した曲を調べたものである。取り扱っている授業としては、4月の「チューリップ」・5月の「こいのぼり」・7月の「たなばたさま」・8月の「おばけなんてないさ」は『音楽Ⅱ』、9、10月の「どんぐりころころ」・11月の「やきいもグーチーパー」・12月の「あわてんぼうのサンタクロース」・1、2月の「まめまき」・3月「うれしいひなまつり」は『音楽Ⅲ』、6月の「かたつむり」は『音楽Ⅳ』で主に学習す

ることになっている。習得者数は、それぞれの授業の履修者数で割合を出したものであり、選択授業のため母数は異なるものとなる。平成28年度の履修者数は、音楽Ⅱが88名、音楽Ⅲが61名、音楽Ⅳが30名であった。

比較結果を見ると、各月のうち半数の曲は7割以上の高い割合で学生も習得していることが分かった。割合の低い曲、8月の「おばけなんてないさ」・12月の「あわてんぼうのサンタクロース」については、学生にも人気の曲ではあるが、ピアノ伴奏の難易度が比較的高いため、ある程度技術のある学生のみが取り組んでいることが要因と考えられる。また、1、2月の「まめまき」・3月の「うれしいひなまつり」は極端に低い数値となったが、これは授業のカリキュラムに原因があると考えられる。『こどもの歌ベストテン』のテキストのうち、音楽Ⅱでは「春のうたベストテン」と「夏のうたベストテン」、音楽Ⅲでは「秋のうたベストテン」と「冬のうたベストテン」の四季の歌を軸にカリキュラムを設定し、学生が各々のレベルに応じた曲数を習得することを課題としており、その中で実習などに向けて、それぞれの園で取り扱っている生活の歌などを適宜学習している。「まめまき」と「うれしいひなまつり」については、テキストの「行事のうたベストテン」の項目に含まれているため、四季の歌の曲数をこなす進度に余裕のある学生が自由に選曲して学習する曲という位置付けになっているため、教員が選曲しない限り、学生が自ら選曲することがほとんどないのが最大の要因である。この結果を受けて、アンケート結果をさらに細かく分析し、授業のカリキュラムにおいても保育の現場に即した選曲を見直す必要があると考えられる。

V. 考察

「弾き歌い」を効率良くかつ効果的に習得する手順として、はじめから一度に全部の要素を練習するのではなく、ピアノを弾けるようにする・歌詞を読み理解する・歌詞はある程度覚える・ピア

ノを弾きながら歌う、といった具合に手順を踏んで練習することが重要であることは全教員の一致するところであった。その他、リズム・指使い・顔の表情など、さまざまなアプローチで学生指導がなされていることを知る事ができた。普段の授業ではそれぞれの教員がそれぞれの個室でレッスンをっており、お互いの指導風景を見る機会がないため、今後も効果的な指導法を提供し合い、情報共有を行っていきたいと考える。保育者養成校の教員の一番の使命は、未来の保育現場で必要とされる保育者を育てることであり、音楽の指導においては、学生の技術や表現力の向上のためであることは当然だが、その先に「子どもたちのため」があることを忘れてはならない。

鈴木（2011）は“幼児教育の場合、その曲をいかに理解して表現するかよりも、その曲をどのように感じてどう表現するかということが大切である。楽曲の表現に「こうしなければならない。」という概念はない。より好ましいものはあったとしても、その子の表現を否定してはならない。否定からよりも受容から多くのことは見えてくるのである。”と述べている。⁴⁾この事からも、子どもたちが感じたままに思い思いの表現を自由に楽しむために、保育者は子どもたちの表現の幅を広げる環境を作る必要があると考えられる。保育者が発信する音楽においても、表情もなく機械的な演奏ではなく、子どもたちがさまざまな表現や感情や情景を感じ取れるような演奏にすることが好ましい。そのために保育者養成校の教員としても、現場で必要とされる保育者を育てるために、保育の現場で取り扱われている曲、年齢別の表現の違いなど、どのような音楽活動が展開されているのか、そして、それに対する学生への指導法など、今後もさまざま角度から研究を進めていく必要があると考えられる。

[引用・参考文献]

- 1) 岡崎善治・近江秀崇：“保育施設で歌われている四季の歌に関する研究”中京学院大学中京短期大学部研究紀要 第47巻第1号, pp.45-52, 2016

- 2) 板東貴余子 編：簡易伴奏によるこどもの歌ベストテン [改訂新版], ドレミ楽譜出版社
- 3) 文部科学省：幼稚園教育要領, フレーベル館, 2017
- 4) 鈴木由美子：“「弾き歌い」に関する一考察”千葉敬愛短期大学紀要第35号, pp.69-85, 2013
- 5) 平井李枝：“教員養成課程学生に対するピアノ「弾き歌い」指導法の研究”宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第2号, pp.91-98, 2016
- 6) 小林茂夫：“<追悼>「チューリップ裁判」の近藤宮子さんを思う”法政大学 日本文学誌要 61, pp.99-101, 2000